山口県では、学校・保護者・地域住民がネットワークを形成し、地域ぐるみで子どもを見守り支援する「地域協育ネット」の取組が積極的に行われている。柳井市日積の「シーズ」は、十数年前より多くの住民が参画して地域の活性化を図るとともに子どもたちの教育活動にも熱心に取り組んでいる。シーズの活動について、会長の西本利治さんに伺った。

＊シーズ結成のねらいと取組、今後の活動をお聞かせください。

○シーズ結成とねらい

平成十五年、日積小統合に際して、二つの小学校のうち百年以上の歴史を持つ小学校のひとつが廃校になりました。

統合問題でこじれた地区民の気持ちを再び一つにし、高齢化が進み、さびれてゆく一方の地域に再び元気を取り戻す活動を始めようという声が上がり「地域活性化の組織」を立ち上げることになりました。

団体立ち上げに際しては、いろんな立場の人へ呼びかけ、地域の活性化をめざしたいという気持ちで一つにまとまっていきました。

団体の名称は、地域に夢の種を蒔き、蒔いた種は私たちが愛情を込め、水や肥やしをやると、いつかは芽を出し、花を咲かせ、また花は実を結び多くの種（夢）を作るという願いが詰まった「シーズ（Seeds）」としたのです。

子どもたちには地域社会の力や枠組みを自覚させるような活動や地元小学校との連携を呼びかけ、学校関係者との共同作業も図りました。

行事では、地域の世代を超えた交流あるいは農山村と都市部の交流を図るイベントを開催しました。その中でも「里山探検隊」「ふれあい運動会」「風ん子どんど」は、恒例行事として十二年経った今でも開催し、ふれあいの輪を広げています。

○新たな事業をめざして

小学校統合の二年後、今度は中学校が閉校となり、木造校舎への依存から脱却するための新たな事業を模索し始めました。

その中心に置いたのは「荒廃した里山の再生を図り、地域の自然を見つめ直す」ことでした。伐採や植林整備・竹工作などの活動や遊びを通じて里山再生事業を行い地域の異世代交流を図り、併せて子どもたちの健全育成と地域づくりに貢献することでした。

探訪シリーズ　この人 この歩み

市民ボランティアグループ「シーズ」の取組

シーズ会長　西本利治さん

里山再生事業を成立させる知識と技術を習得するため「林業基礎講座」を受講しました。そして「里山再生事業地」として、山林、田地を地主から借り受け、「お山の学校」と命名し里山事業を始めました。「お山の学校」では子どもたちと一緒に伐木、伐竹、植樹を繰り返し、今では植樹によってクヌギやコナラが林立し、子どもたちが昆虫採取や植物観察等が自由にできる場へと変貌しました。

「お山の学校」周辺は、「森の遊歩道」「炭焼き窯」「東屋」、そして「ビオトープ」で、憩いの場としても提供しています。

○今後の活動

活動拠点であった木造校舎は解体され、跡地に「都市農村交流施設・ふれあいどころ四三七」が新たに建設、運営されています。里山再生事業で確立した「お山の学校」を新施設の機能として位置づけ、新たな活動の展開を模索しているところです。一例として、ビオトープの周辺に多種多様な「薬草」を移植する構想です。

新事業を模索しながらも今までの活動で培った貴重な経験、知識をさまざまな場面に生かし地域の活性化や地域の自然、資源を活用した子どもたちの健全育成に更なる力を注いでいきたいと考えています。

シーズの地域に根ざした体験的な活動は、日積地区の元気の源となり、子どもたちのふるさと意識や豊かな心を育んでいる。長年の活動からメンバーのつながりも深く、和やかな雰囲気と前向きな姿勢で取り組む活動は、日積地区だけでなく柳井市にとってなくてはならないものになっている。（日積小　吉田　博）

編集後記

平成二十七年度は、全国連合小学校長会研究協議会山口大会一色の年だったと言っても過言ではない。

それに伴い「会報」の紙面割りを例年とは大きく変更したにもかかわらず、ご理解とご協力をいただいた会員の皆様に感謝申し上げたい。

さて、皆様のおかげで、今年度二回の「会報」を発行することができた。変化をつけた二回の発行の中にも、「支部情報」で各支部の特色ある研究や活動の様子をご紹介いただいたこと、校長としての熱い思いを広い視野で語っていただいた「飛耳長目」、「この人このあゆみ」では、様々な分野で活躍されている方々からの示唆の富んだお話を掲載することができた。

平成二十七年度の全連小山口大会の特集号が第二七〇号となったことに、何か因縁を感じるのは私だけだろうか。

「会報」の編集を通して、何十年も綿々と続いてきた諸先輩方からの縦のつながりと今年度から三〇二名となった小学校長の横のつながりを強く感じた次第である。

微力ながらも七名の編集委員で、このつながりを大切しながら編集に携わらせていただいた。

終わりにあたり、ご多用中にもかかわらず、原稿執筆をご快諾いただいた皆様に感謝の意を表し、編集後記としたい。